# 日蓮正宗の高座説法（新説免許）における『願文』について根本的に改めなくてはならない事

廣田　頼道

正信会の中でも毎年若い修行僧が晴れて高座説法（新説免許）を行う。社会で言えば成人式であり、ここをスタートとして本格的な信行学の道へ入って行くことは、廻りから見ていても清々しい気持を持つと共に、自分の行った時のことを想い出し、怠慢している今の自分に、しっかりしなければと自戒の気持を新にするのであります。

私達が高座説法をした時には、二十人以上の新説者がいたために、『願文』は一番はじめの人と最後の人だけで一人一人がするということはなかった。現在正信会が天奏寺で執行している高座説法は説者一人一人全て『願文』の所作を行っている。

私自身『願文』の経験が無いにもかかわらず、まして二十年以上の歳月が流れているにもかかわらず、あの『願文』の日常に無い独特な節廻しの発声が妙に耳の奥に残っているので、一度はこの『願文』の出典はどこにあって、どういう背景を持ち、どういう意味が込められているのかを、学んでおきたいと思った。とは言っても文献に明るくないので、その面に明るい方に教えて頂いた、そしてその出典を知り、その文献を考えるにつれ、私としては、何かこれは変だなあと思うに致った。

願文

願我生々見諸佛
世々恒聞法華經
恒脩不退菩薩行
疾證無上大菩提

これが新説者に渡される『願文』の原稿であります。これを経文読誦と同様漢文体で読み上げ、文字の右側にふり仮名のように付けてあるのが昔から仏教において使われる発音記号であります。／は尻上りに読み●は強く大き声で〰はうねりを三回入れ、＼は尻下りに読むことを表記しているのであります。この『願文』を訓読みにすると

願わくば我、生々に諸仏を見
世々恒に法華経を聞き
恒に不退に菩薩の行を修して
疾く無上大菩提を證せんと

願わくば、私はいついかなる時、いかなる国土に生れても、諸仏を拝し
いかなる時、いかなる国土にあっても法華経を聞き
恒に退くことなく自行化他の菩薩の修行をし
はやく成仏の境涯を明らかにしたい

こういう内容の意味を込めた文章であります。

『願文』とは

神仏に願いを立てる者が、その旨を書き記した文章であったり、法会の時に願主の志を述べた表白文（法会の趣旨を記し仏に申し上げる）決意文、誓状という意味であります。たとえば阿弥陀如来の四十八願等も一切衆生成仏に通ずることのない低劣な内容ですが一応『願文』の一種であります。

日蓮正宗の『願文』は、前にあげた文章を高座説法の自分にあてられた講題の説法をする前の所作の中で読みあげるわけですが、高座説法の中で申し上げるように三世の大願という、過去、現在、未来にわたってこの法華経の為に身を粉にして「一心欲見仏、不自惜身命」の菩薩行に精進し、成仏をとげたいというこの文章の意味は、誓状の意味を強く含んだ『願文』ということだということになります。

特に最初の一行目と二行目の

願わくば我、生々に諸仏を見
世々恒に法華経を聞き

の生々世々の表現などは実に三世の大願というにふさわしい、現世だけでなく三世に恒っての菩薩行の誓いの表明の意味を持っていると思います。

さて、『願文』というのは「誓願」ということで

あります。

「誓願」には「総願」と「別願」の二つがあります。「総願」は「止観大意」（一巻、中国天台宗妙楽大師湛然の述作、天台の摩訶止観の要点を説いたもの、初めに天台の法門の伝統を述べ、次に止観十巻の要領を略説している。存家信者李華の為に書かれたもので、止観の入門書として、古来から初心者必読の書とされている。この中に四弘誓願が示される。）に示されるような、全ての菩薩が初発心の時に基本として起すべき誓願、つまり四弘誓願のことを言います。「別願」は、先ほど書いたように阿弥陀仏の四十八願や、「悲華経」（10巻、中国北涼代の曇無讖訳、経名は慈悲の白蓮華の経という意味で、無量の慈悲のある釈迦を白蓮華にたとえてつけたもの、釈迦が浄土に成仏せず五濁の娑婆世界に出生し成道し、一切衆生を救済したのは無量の慈悲の姿であるとしてその因縁を説き、他の浄土成仏の諸仏は余華であり、釈迦は白蓮華であると書かれる。この中で釈迦が因位の修行の時宝海梵志として一切衆生を救わんが為に宝蔵如来の前で五百種の誓願を立てる。）に説く釈迦の五百誓願や、「薬師本願経」（正式名「薬師瑠璃光如来本願功徳経」本菩薩の道を行ずる時、薬師如来が十二の大願を発した。例をあげると第11飢渇の衆生に上食を得しむる願。第12貧乏衣服なき者に妙衣を得しむる。等々）に説く薬師仏の十二願などの特定な個人的目的を立てた願いを「別願」というのであります。

「総願」となる四弘誓願は、

①衆生無辺誓願度
②煩悩無辺誓願断
③法門無盡誓願知
④無上菩提誓願證

の四つであります。

①は、一切衆生を全て悟りの彼岸に渡すことを誓う
②は、一切の煩悩を断つことを誓う
③は、仏の教えを全て学びとることを誓う
④は、仏道において無上の悟りを得ることを誓う

という意味内容であります。

四弘誓願の「弘」は菩薩行の広大無辺のひろがりを表わしているのであります。

しかし、法華経寿量品の内容からいうと、①の彼岸に渡す。②の煩悩を断つ。③の全ての教えを学ぶ。

④の無上の悟りを得る。ということが、四弘誓願がどれほど大切な初発心の誓願といえども、爾前迹門の低い思想であり、寿量品に説かれる目的感、価値観とまったく次元の違う低い思想でしかないことが良く分ります。

「願文」「誓願」の意味内容を前置きとして説明して来ました。このことを頭の中に置いて、はじめに、日蓮正宗の高座説法（新説免許）における『願文』の出典を考えると、何かこれは変だなあと思うに致った。ということを示しましたが、この変だなあについて文章をすすめて行きたいと思います。

高座説法の『願文』の出典は、御書としては偽書の評価が強いのですが、

「読誦法華用心鈔」新定2334P昭和定本2178Pに唯一あらわれています。

讀誦法華用心鈔

夫讀誦法華行者先須朝洗手漱口、取經時當觀念法界道場。諸佛現在於此説法。經云、常住此説法、我常住於此云云。又云、娑婆世界其地瑠璃坦然平正。閻浮檀金以界八道。又云、當知是處即是道場、諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提、諸佛於此轉於法輪、諸佛於此而般涅槃と説給へり。豈離伽耶別求常寂。非寂光外別有娑婆。以此等明文當觀察法界道場。而後發惣願。頌云、衆生無邊誓願度、煩悩無邊誓願斷、法門無盡誓願知、無上菩提誓願證。次別願頌云、願我生々見諸佛、世々恒聞法華經、恒修不退菩薩行、疾證無上大菩提云云。

前に書いた「四弘誓願」を総願とし、次に別願と

して「願文」を挙げているのであります。これでは、この願文の出典が分りませんので「録外微考」巻下禅智院日好著886Pを見てみると、この「読誦法華用心鈔」の項に

文次別願頌云。願我生生見諸佛等　此四句文。於宗門。談義前必誦之。何處有之。本據未知之。檀那先徳一實菩提偈出。小部集巻一編入。往見。但彼恒修不退菩薩行。云恒修不退普賢行。以疾證無上大菩提云疾達無上大菩提。

このように示し出典の出所を「一實菩提偈」檀那覚運著と示している。ただここで指摘しているように、まったくの同文でなく、日蓮正宗で用いる『願文』と違う点がある。

①（恒修不退普賢行（一實菩提偈）
　　←
　（恒修不退菩薩行（日蓮正宗）

②（疾達無上大菩提（一實菩提偈）
　　←
　（疾證無上大菩提（日蓮正宗）

これはどう考えても拝借して自分達流にアレンジしたものとしか考えられない。

①の普賢→菩薩の変化は

普賢は仏の慈悲のきはまりを表わし、慈悲をつかさどる菩薩の意味を持つが、普賢行となると、華厳の修行の一つであり、一行を修行すれば、一切の行を具する意味を持つ為、広範な意味を持つ菩薩行にアレンジしたものと思える。

②の達→證の変化は

順次に達する意味よりも、菩薩の行を修する生き方そのものが法華経の無上大菩提をそのままに表わし證するという意味に持って行きたかったものだと思う。

爾前迹門に重点を置いている文章を、本門の方へ

重点を持って来たかった意志がこのアレンジに見える。

さて「願文」の原文となる「一實菩提偈」は、佛書解説大辞典一巻141Pによれば、

覚運（天暦七～寛弘四AD953～1007述）

法華一乗の経意に依って菩提心を発起することを述べたるもので、七言一句聞いて二百有餘の偈文を以て直截簡明に法華の妙旨天台の圓意を讃し、諸仏本迹の十妙義は我心心眞如を出でざることを叙べて、圓融無作の四弘誓願を起し、最後に久遠実成常在霊山の釈迦、妙法華一乗経、西方極楽の化主阿弥陀如来等に帰命を捧げてある。（硲　慈弘）

このように説明されている。

長文の為、全文はここに弘用出来ないので、文末だけここに示す。「大日本仏教全書」

是故我心寂光中　悉具十方一切佛
諸佛本迹十妙義　不出我心心眞如
是故願我於未來　如今佛説法華經
願我生生見諸佛　世世恒聞法華經
恒修不退普賢行　疾達無上大菩提
圓融十界諸衆生　我今發誓必濟度
圓融五住諸煩悩　我今發誓必斷除
圓融四門諸道品　我今發誓必盡知
圓融此性眞佛道　我今發誓必頓得
南無久遠實成常在靈山大恩教主釋迦如來
南無道場證得本地甚深一乗妙典
南無法華曾中發起影響當機結縁四衆
南無西方極樂化主阿彌陀如來
南無十方三世一切三寶
南無自他法界滅罪生善命終決定往生極樂

著述の覚運については、「日本仏教人名辞典」104Pによれば

天台中期の天台宗の学僧、檀那流の祖諱覚運通檀那僧正生京都出京都出藤原貞雅の子師良源・静真・皇慶事出家ののち比叡山に登り、学識高く広学堅義の精義者を務め多数の著作を残す。東塔の檀那院に往したことからその法脈を檀那流と称し、源信の恵心流と並んで天台宗の二大学派をなした。藤原道長に「摩訶止観」を講義するなど宮中の貴族に接近し法会の講師などを務めた。

著止観勘文一巻、念仏宝号一巻、草木発心修行成仏記一巻、十二因縁義私記一巻、一心三観記一巻など多数。

こういうプロフィールであります。

恵心流は観心を重視し、真言の教えと深く交って行きます。仏の悟りの方からもの事を見ます。檀那流は教相を重視する学派です。菩薩の方（九界の側）から物事を見、悟ることよりも、そのプロセスの修行を重要視し顕教の儀式の大半は、この檀那流から出ているのであります。が、行き着く先は同様であります。

私はこの「一實菩提偈」がそれほど意味のある重要ですばらしい文章だとは到底思えないのですが、この「一實菩提偈」をアレンジした日蓮正宗で「願文」とされているものが天台宗では「台宗課誦所収」（勤行要典みたいなもの）の勤行作法の一環の作法としてなされているのであります。

ここにあげられるように、天台宗では揚勧請として用いられているということであり、節廻しは日蓮正宗の「願文」とはまったく違っていること、法華経が深妙典という表現に変っていることが良く分ります。

「揚勧請」の「揚」とは、天台宗の説明によれば論義法会、読経会算に経題を揚げ出す前に唱える発願の文である。勧請偈と称する文があって、勧請、隨喜懺悔、持戒、発願の五段の偈文より成り、これはその最後の一段を唱えるものである。日蓮宗では願文といっている。「揚」とは称揚の義で、高らかに明るく誦唱し――――。

としている。ならば「勧請」とはどういう意味内容なのかというと、言葉から言えば請い勧めるということになる。教えを請い、まことの心を持って仏に説法を請い願い、仏が永久に世に住して人々を救わんことを請願する。又、法要の時、仏菩薩にその場へ降臨することを請願する。

しかしこの「一實菩提偈」の文章の意味内容が「勧請」と言うにふさわしいとは思えない。どう考えても信仰者、修行者、説法者の誓状、こうありたいと請い願う願文としか読めない。諸天、諸佛への降臨の呼びかけもない内容を何故「勧請」と言えるのか。

話は横にそれるが、日蓮正宗の朝の勤行の初座は、本尊を差し置いて一番に行なわれる。これこそ法華守護の諸天善神に法華経の会座に同心にして集えという「勧請」の勤行だと思われる。

前に挙げた「録外微考」巻下の中で禅智日好は

此四句文。於宗門。談義前必誦之。

とあって、玉沢27代禅智日好は1734年86才寂の方ですから、大石寺第19世日舜から29世日東の時代となります。この時代において、天台の化儀の流用がなされていたということになります。

日蓮正宗にはどの様にしてこの「願文」が入って来たのか。日蓮宗でも高座説法の化儀としてやっているのか、天台宗のように通常の勤行用式の中でやっているのか、調査をすれば分ることですが、分っても流入された時代のことが今となっては分らないのですから分っても意味が薄いと思います。日蓮宗からそのまま批判なく流入して来たのか。もしくは、要法寺から貫首を迎えた時代に天台宗の化儀と混同し流入して来たのかのいずれであって、決して日蓮大聖人にもともとある化儀ではないはずである。何故ならば日蓮大聖人は、天台宗の念仏、真言等と混同し法華一本に立つことの出来ぬ姿を批判し見切りをつけて自ら教えを開いたのであるからである。

## 結　論

日蓮正宗の高座説法の「願文」は諸天の降臨を願う「勧請」ではなく「誓状」の意味を持つ「願文」三世の大願を誓うものとして行なわれているものであります。

化儀作法は、長い歴史の中で何の為にするのか意味が分らなくなっても大切に守らなければいけないプラスの財産と、歴史の中で垢の様にこびりついてくるマイナスの財産とあります。出典として「一實菩提偈」であることはたしかな事だと思える以上、何故法華念佛混同の天台宗の中で作り出され

南無西方極楽化主阿弥陀如来

と誓われた上になされた文章を観心の本尊の前に広がる高座説法の法筵の場に、ありがたそうに、うやうやしく何故しなければならないのか。やる意味が無いではないか。

こういうと、広田はなんでも否定する、否定すれば良いと思っている。否定からは何も生れないと言われる人がいる。私は今まで否定の為だけにする否定をして来た憶えはない、今置かれている現実をしっかり見つめて反省し再生の為に今迄やって来た考えを否定すべきだと一つ一つあげて言って来た。

節廻しの発音の点は失われ残念かもしれないが、私は、たとえば迹門であっても、法華経の勧持品は衆生の側の正法に対する誓いの言葉が経文になっているのであるから、

我等仏の滅後に於いて、当に此の経典を奉持し、読誦し、説きたてまつるべし。（開結435P）

是の経を説かんが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず但無上道を惜しむ（開結443P）

この他にも、たくさんの法華経の行者としての使命、責任を示した誓いの言葉は、法華経の中に降る星の如く散りばめられてあります。

○出所のたしかさ

○意味内容の高座説法に対する適格さ

○意味内容の深さ

以上の点から、身延日蓮宗も大石寺も正信会も今やっている「願文」のあり方を真剣に考え改めた方が良いと思います。

そうすることは、改善になっても改悪にはなりません。